

---

# タバサのグルメ

逢坂十七年蝉

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

タバサのグルメ

### 【Nコード】

N9448Y

### 【作者名】

逢坂十七年蝉

### 【あらすじ】

北花壇騎士タバサの知られざる食生活

この作品はarcad

ia様にも投稿させて頂いております。

リュティス、サン・ドニ通りの挽き肉入り麦がゆ

「……ふん、あんた、きちんと食べてるの？」

北花壇騎士の任務で呼び出されたプチ・トロワで、わたしは“いつも通り”の手荒い歓迎を受けた。

侍女たちに卵や腸詰めを投げつけられ、汚れた服で王女に謁見するのかと裸に剥かれる。

手を変え品を変え繰り返し返される、下らない嫌がらせ。

「あんたはもう、王族じゃないのよ？ 分かっているの？ 多少魔法ができるからって、なに余裕を気取ってるの？」

わたしに余裕があるんじゃない。あなたに余裕がないだけ。

そう思うが、口には出さない。

昔は、違った。

父が亡くなる前のイザベラは、魔法の才がなくとも爛漫な従姉だった。

無言で見つめ返すわたしをイザベラは睨みつける。

大きく豪華な冠の下で細められるイザベラの青い瞳は猫科の生き物を思わせる。

お定まりの歓迎、難詰、嫉妬混じりの嘲笑。

この従姉は、いったい何を羨ましがっているのだろう。

部屋を沈黙が支配した。

従姉姫の秀でた額に玉の汗が浮かぶ。

無言での見つめ合いに耐えられなくなったかのようにイザベラは鼻を鳴らし、ベッドの上に散らばる書簡の中から一通を投げて寄せす。

「北花壇騎士七号のあんたの任務よ。さっさと片付けてきなさい」  
わたしは服を着て足早に部屋を退出した。  
見送る部屋の主が、昔読んだ物語の囚われの姫に重なったのは何故だろう。

とにかく、お腹が空いていた。

任務の命令書だと思ったものは、リュティスに新しく出来たレストランの招待状だった。

多分、イザベラが間違っただと思う。

戻って正式の書類と交換しようかとも考えたが、一日に二度もプチ・トロワに足を向けるのは気が引けた。

シルフィードを迎えに行くにも、まずは腹ごしらえだ。

本当に重要な任務があるのなら、また呼び出しがあるだろうと多寡を括って招待状の店を探す。

呼び出された時間が早かったので、朝食を食べ損ねた。お腹の中がキレイにすっからかんだ。

路に迷いながら見つけたのは少し気取った店構えのレストランだった。  
ちよつとこつという店は苦手だけど…… たまにはこんなのもいいかもだろう。

入り口でボーイに招待状を手渡すと、露骨に不審な顔をされる。

ドレスコードのある店に普段着のシャツとスカートでやって来た少女が、王女宛ての招待状を持っていたのだ。

怪しまれて当然かもしれない。

散々待たされた上に、わたしは結局食事にありつくことが出来なかった。

奥から出てきた支配人に頭を下げられ、体よく追い返されたのだ。もうすぐ食べられると思った期待が裏切られるというのは、辛い。

わたしはまたも空腹を抱えて歩いている。

リュティスの人間は歩くのが早い。

トリスタニアの人の流れに慣れたわたしには少し堪える。

路という路に人があふれて圧倒してくる。

しかも、霧のような雨まで降って来た。

種なしパンの売り子が雨宿りしているのが見えるが、パン程度ではこの空腹は治まりそうにない。

お腹は減りすぎている…… どうしよう。

何でもいいと思いながら入る店の無さどこみあげる空腹にいらだちを覚える。

ここだ、入ってしまえ。

「いらっしやい」

わたしが飛び込んだのは安っぽい造りの定食屋だった。

昼下がりの定食屋には働き疲れた人足たちが腹を満たす為に集まっている。

壁にはたメニューなんて掛けられていない。

字が読める人間が入るような店ではないようだ。

周りの人が食べているものを物色する。どれもこれも良い匂いが漂っている。

どうしてこう、他人の食べているものは美味しそうに見えるのだろうか。

さて…… なににしようか。

全部食べてみたいが、とりあえず空腹を満たすのが先決だ。

「ん？」

はす向かいに座っている商人風の男の食べているものが目に留まる。

見たところ麦がゆのようだが、色々と具が入っているようだ。

忙しそうに店内を切り盛りしている女将さんに注文する。

「スイマセン、あの「麦がゆ」をひとつください。大盛りで」

「はいよ」

料理を注文するときだけは物おじせずにハッキリという。

注文を聞きかえされるのはやっかいだ。

「あと、サラダ」

「サラダ、何？」

「何があるの？」

「えーと、ハシバミとキャベツとタマネギ……」

「ハシバミ下さい」

向かいの男が旨そうに串焼きの肉を口に運んでいる。

厨房にわたしの注文を伝えている女将さんに「あの串焼きの肉も、追加で」と伝えた。わたしは、お腹が空いているのだ。

注文をしてしまうと店内を見回すゆとりがでてきた。

日雇いの労働者たちは朝の内だけ真面目に働いて、昼の休憩から帰って来ない。戻って来たとしても酒臭い息で仕事にならない。

半分だけ先払いで貰う給料は定食屋で安いご飯とエール酒か安ワインに化ける。雇い主も最初からそのつもりで、昼からは別の人間を雇う算段だ。

赤い顔の人足たちが笑い合いながら木のジョッキで酒を酌み交わ

す。

もうどれだけ、ああやって笑っていないだろう。

「いらっしやい」

店には引っ切り無しに客が入って来る。大した繁盛だ。

入って来たのは商人の徒弟風の男だった。

「食べてくの？」

「持ち帰りです」

持ち帰り！　そういうのもあるのか。

「シチュー二つとサラダ二つ、えっとキャベツとタマネギね」

「はい」

パンは自前で用意するのだろうか。

そんなことを考えていると、目の前に注文した麦がゆがやってきた。

「はい、おまちどうさま」

<麦がゆ>

鶏のブイヨンでしっかりと味付けされたスープで炊かれた燕麦の

かゆ。豚のひき肉とにんじん、たまねぎなどの具がいっぱい。

<串焼き肉>

豚の腿肉をごろごろした塊に切ったものを串に刺して焼いたもの。ソースには牛のフォンを使っている。

<ハシバミ草のサラダ>

ほとんどハシバミ草だけのサラダ。

かゆの中にも豚のひき肉が入っているので、豚がかぶってしまっ  
た。

なるほど、この店は妻がゆとサラダだけで十分らしい。

汁気たっぷり串焼きを口に頬張る。

歯ごたえのある肉に噛みつくときから肉汁があふれてソースと絡  
み合う。

こんがり焼けた表面と、ほどよい柔らかさを残す中身のバラ  
ンが絶妙だ。

ウン、美味しい。

こつこつ食べ物少し下品に齧り付く方が、旨い。

続いてかゆを啜る。

「こちらもブイヨンがしっかりとしていて麦がゆなのにスープを飲んでいのような味わいがある。」

大きめに切ったにんじんとたまねぎにもしっかりと火が通っていて、甘みが引き出されている。

燕麦のかゆはさっぱりしすぎることが多いが、豚のひき肉を加えることでしっかりとしたボリュームもでてくる。

ハシバミのサラダを頼んだのは正解だった。

豚づくしの中でとても爽やかな存在だ。

食事がどんどん進む。

「すみません」

追加でチーズとにしん、それにりんごの果汁を頼む。ついでに麦がゆとサラダをお代わりし、締めタルトもお願いする。

酔客は多いが良い雰囲気のお店だ。

気が付けば目の前には空いた皿が積み上げられていた。

まだもう少し食べられるが、あまり食べ過ぎるのもよくない。

美味しく食べられるところで止めるのが、食事を楽しむ秘訣だ。

「お勘定を」

「は、はい……」

心なしか女将さんの笑顔が引き攣っている気がする。

わたしは代金を払うと店を出た。

振り返ると、店の客がわたしの姿を視線で追っている。

やはり、杖を持った客はあの店には不釣り合いだったのだろうか。

ふと、イザベラをここに連れて来たらどうなるだろうと考える。

王宮からあまり出ない従姉姫は、下町の定食屋で出されるぞっか  
けない食べ物のことなど知らないはずだ。

憎いはずの相手と、一緒にごはんを食べる想像をする。

なんだか不思議な感じがする。

そんなこと、ありえるはずがないのに。

知らず、口元に笑みがこぼれる。

雨はいつの間にか止んでいた。

わたしは得体の知れない満足感を味わっていた。

「ない！ ないわ！」

プチ・トロワの主はベッドの上に散らばる書類の束を漁っている。

その表情は歳相応の少女のものだ。

「お、恐れながら殿下、何をお探しなのでしょうか？」

恐る恐る尋ねる侍従に絹のまくらが投げつけられる。

「招待状よ！ レストランのー！」

シャルロットがあまりにお腹を空かしているようだから、招待してやろうとわざわざ用意していたのに。

渡すタイミングが図れず、いつも通りの冷たい対応をしてしまったことが悔やまれる。

本当は従妹であるシャルロットともっと話したいのに、どうしてか本人を前にすると辛辣な態度を取ってしまう。

今回の任務はそれほど危険ではなさそうだけれども……

「そうだわー！」

イザベラに名案が浮かぶ。

シャルロットでも二の足を踏むような任務、例えば吸血鬼討伐なんかを命令して、あの子に拒否させよう。

泣いて許しを乞うあの子を慰めるために、日頃の慰労も兼ねてレストランに招待するのだ。

これなら、大丈夫。きつと上手くいく。

ヴェルサルテイルの空に、大きな虹が掛かっていた。

その後二人が一緒にご飯を食べられたかどうかは、また別のおはなし。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n9448y/>

---

タバサのグルメ

2011年11月28日06時05分発行